

オンライン辞書検索トレーニングが 語義選出の正確さに与える効果

—非英語専攻大学生を対象としたパイロットスタディー—
The Effects of Out-of-Class Online Dictionary Reference Trainings
for University English Learners: A Pilot Study

藤田 恵里子*

Abstract

Dictionaries are essential tools for independent English learning. However, some university students have not acquired the proper strategies to make use of them. They tend to ignore the part of speech and only check the first meaning. Therefore, strategy trainings are required for their effective use. At universities, though, there is not enough time spent on teaching students dictionary strategies during class hours. This present study attempts to clarify the effectiveness of out-of-class online dictionary reference trainings. For this purpose, students were assigned out-of-class online tasks to look up given words and choose the most appropriate meaning in the context, using the specific online dictionary. They were immediately provided with the correct meanings and scores using the auto-grading function of Google Forms. The results showed that out-of-class training was effective for students with higher English proficiency, also in encouraging all levels of students to check the additional meanings of the word.

キーワード：非英語専攻大学生, リメディアル, オンライン辞書検索トレーニング, 語義選出の正確さ, 自習課題

1. はじめに

英和辞典は英語の自律学習に不可欠なツールである。しかし、昨今紙の辞書を持ち歩く学生をあまり見かけなくなった。実際、小山・山西(2017)が日本人大学生の英語学習者を対象に使用辞書調査を行った結果、スマホ・オンライン辞書の使用が34.2%と最も多く、次いで電子辞書(32.9%)、スマホ・アプリ辞書(31.6%)、そして紙辞書(0.6%)の順に使用者が多いとしている。

また、電子辞書(83%)、スマホ・アプリ辞書(39%)、オンライン辞書(27%)、紙辞書(23%)、そしてパソコンの辞書ソフト(4%)の順で利用者が多いという結果を示す先行研究もある(Hurbert, 2017)。これらの調査結果から日本人大学生で紙辞書を利用している英語学習者は少数派であるといえるだろう。しかし、根強く紙辞書を支持する教員がいることからわかるように(安井, 2009)、紙以外の辞書には欠点もある。例えば、特に電子辞書利用の際、スクロールダウンの必要性から後方に提示された語義を見落とす可能性が指摘されているが(相澤・望月, 2012; 西尾, 2013; 安井, 2009)、この特徴は紙辞書以外のすべての辞書にあてはまるだろう。この他に

2021年11月30日受付

* 江戸川大学 国際交流センター助教 外国語教育

英語が得意でない学習者が正しく語義を選べない原因として、品詞の考慮が十分でないことが挙げられている (Koyama, 2015; 中山・大崎, 2009; 大藪・藤田, 2021)。このような傾向を改善するためには辞書指導が不可欠であるが、限られた授業時間内にその時間を取るのには難しい。そこで、本研究では、授業時間外に宿題として取り組む、オンラインの語彙検索トレーニングが、語義選出の正確さを向上させるうえで有効かを検証した。

2. 先行研究

2.1 辞書指導の観点

語彙検索は語学学習において日常的に行われている行為であり、学習者も慣れていることが予測されるが、語義を調べる課題を見ると正しく選べていない学習者が意外に多い。そのため、語彙検索の際に着目すべき観点の指導は不可欠である。

指導の観点として、小山は辞書使用方略に関する一連の研究において、メタ認知的活動を促す重要性を主張している (Koyama, 2013; 2015; 小山, 2015; Koyama & Ogura, 2018; 小山・藪越, 2011)。すなわち、1) 辞書を引く前に未知語の意味を文脈から推測する、2) 語彙情報を確認後、自分が持つ背景知識と関連づける、3) 辞書から文脈にそった意味を調べ、必ず用例を確認する、4) 特に未知語は、必ず発音記号を確認 (または、電子辞書の音声機能を使用) し、実際に声に出して発音してみる、の4観点を指導の焦点としている。一定の英語力がある学生にとってこのようなメタ認知活動が有益である一方で、特に英語があまり得意ではない学習者の場合、より初歩的な手順を踏めていないために正しい語義が選べていないことが先行研究 (相澤・望月, 2012; Koyama, 2015; 中山・大崎, 2009; 西尾, 2013; 大藪・藤田, 2021; 安井, 2009) に示されている。

大藪・藤田 (2021) では、非英語専攻学習者を対象に語義検索課題を課し、印刷辞書とスマホ・オンライン辞書のいずれかを使って検索させ、語義選出の正確さを比較した。その結果、英語力が低い学生は辞書に記載されている最初の意味を選

択しがちで、特にスマホ・オンライン辞書を使用した際には品詞選択で間違える傾向が見られることが示唆された。

中山・大崎 (2009) は、学習者が電子辞書を使用するときに活用する辞書スキルとその英語力による違いの特定をするために、英語専攻の大学生 (4名) に対して、英文和訳の課題を課し、検索行動及び読解の様子を観察、インタビューを実施した。その結果、特に下位群の学生は、第一義しか調べない、簡単に諦める、品詞を推測して辞書検索を始めても推測自体が間違っていたり、検索前に行った推測を忘れてしまったりするといった傾向があることがわかった。

相澤・望月 (2012) 及び安井 (2009) においては、特に電子辞書使用時、学習者は初めのほうに表示されている語義しか確認していないことが多いため、辞書指導が必要としている。西尾 (2013) も学習者の同様の傾向を指摘し、紙辞書の有用性を述べている。「第一義しか確認しない」という行動は、電子辞書のようにスクロールダウンの必要がある辞書を使用する際は特に強く表れるだろう。

また、Koyama (2015) では、非英語専攻学習者を対象とした、電子辞書の方略指導後に実施されたアンケートにおいて、(指導後は) 例文、品詞、発音を確認するようになったというコメントが見られた。このことから、辞書指導前には品詞に注意を払っていない学習者が少なからずいたことがわかる。

以上のように、辞書指導において、特に英語が得意でない学習者の場合、メタ認知的活動よりも初歩的な観点、つまり、1) 第一義以降も確認する、2) 品詞も確認する、という2観点を目を向ける癖づけが必要であろう。

2.2 辞書指導の有効性

中学校においては、辞書で必要な情報を調べる態度と能力の育成を目指すことが指導要領で求められており (文部科学省, 2017)、その必要性は多くの教員が認めている (内田, 2009)。実際、辞書指導の方法を紹介しているウェブサイト⁽¹⁾が

存在することからも、その関心の高さがうかがえる。対象が中学生ということもあってか、このサイトでは紙辞書の使用を前提としているが、Hurbert (2017) や小山・山西 (2017) の調査結果が示すように、特に大学生英語学習者は電子辞書のような紙以外の辞書を使用することが多いようである。このような傾向を受けて、特に大学生を対象とする研究においては、電子辞書使用の指導方法の有用性を検証するものが多く見られる。

小山・藪越 (2011) では、中級レベルの大学生英語学習者 (8名) を対象に、指導者自身が実演しつつ、小山 (2011) で示された4つの観点に焦点を当てさせるというメタ認知活動を取り入れた訓練を5週間実施し、指導した辞書活用方略、英文読解力及び検索した未知語の定着率への影響を測った。その結果、辞書使用方略が定着する可能性と、辞書指導が未知語を多く含む英文読解力の向上に寄与する可能性が示唆された。ただ、人数が少なく個別指導が可能であったことが功を奏した可能性も指摘している。続く研究では、17名の大学生を対象に12週間 (Koyama, 2013)、その後この研究に参加した学生の中から15名を対象に10週間 (小山, 2015)、それぞれ辞書検索指導を実施し、その方略をどの程度保持できるか検証した。その結果、いずれの研究においてもメタ認知方略は辞書検索に必要とされる複雑な認知プロセスの保持に役立つと結論づけている。つまり、学習者は一度使用方法を習得すれば、その後の自律的学習に辞書を活用できるようになる可能性が高いということである。さらに Koyama (2015) では、英語専攻の学生を対象とした先行研究 (Koyama, 2013; 小山, 2015) とは異なり、非英語専攻の学生14名を対象として、18週間電子辞書検索方略の指導を実施し、読解力への影響と指導した方略の保持を検証した。その結果、検索回数は減少していたにもかかわらず読解力は向上し、辞書方略のみならず意識的に検索を行う姿勢は保持されたと結論づけている。

いずれも本研究の意向とは異なりメタ認知活動を中心としていたが、着目すべき観点の意識付けを図るために授業内での辞書指導が有効であるこ

とが先行研究によって示された。しかし、いずれの研究も対象人数は4人~17人と比較的少なく、小山・藪越 (2011) が指摘するように、個別指導が功を奏している可能性が否めない。これは、少人数の場合、教授した観点に則していない行動が見られた際に即座に介入できるため、正しい方略が定着する可能性が高いということだろう。一方、多くの大学における一般教養の英語は、1クラス30人程度在籍しており、手取り足取り指導をするのは現実的ではない。また、授業時数も多くの大学において週1回と限られていることから、授業時間内に辞書指導の時間を取るのは難しい。そこで、本研究では教師の介入を最小限にし、宿題の形で取り組みさせるオンラインの語彙検索トレーニングが、学習者の辞書方略の改善に役立つかを検証した。

3. 調査目的

本調査は、課題を提示する以外教員は直接介入せず、宿題としてオンラインの語彙検索トレーニングを課した場合、1) 語義選出の正確さは向上するのか、2) 語義選出の正確さは英語習熟度とどのように関係するのか、3) 先行研究に挙げられていた英語学習者の辞書方略における、「第一義を安易に選ぶ」、「品詞を確認しない」という2点の問題傾向が改善されるのか、4) 辞書検索能力の向上に寄与しうる能力は何か、の4点を検証した。

4. 調査概要

4.1 調査参加者

本研究は、関東圏の私立大学で一般教養英語を受講する学生を対象として実施した。調査に参加した学生の総数は、非英語専攻の1年生98名 (全4クラス、各25名前後) であった。英語力を測るために、調査開始前に英検準2級レベルの主に語彙の知識を問う、英語力測定テスト18題 (資料1) に Googleform を使用して解答させた。その結果、平均は9.49点 (18点満点) であり、英検準2

級のレベルに満たなかった。

調査参加者には、調査に関する説明文書を moodle で共有した上で、説明動画を視聴させた。本調査への参加は任意であり、不参加でもその後の受講に関して不利益はないこと、個人情報及びデータの扱いには細心の注意を払うことを説明し、Googleform を使用して同意を得た。また、仮に調査に不参加と回答した場合でも、調査対象となる、語彙検索トレーニング（8回）と語彙検索テスト（2回）は成績の評価項目となる宿題の一部として実施するため、提出する必要があることを併せて説明した。

4.2 使用辞書

本調査では、同内容の印刷辞書が存在することから信頼性が高く、無料で使え、視認性が高いという理由で、Longman Online Dictionary を使用するよう指示した。オンラインの辞書を指定したのには理由が3つある。まず、先行研究（小山・山西，2017）にも示されていたように、昨今学生が好んで使用する傾向にあることである。次に、無料オンライン辞書であれば紙辞書や電子辞書とは異なり購入の必要がないため、教員を含め全員が統一の辞書を使うことができ、後述するオンラインの語彙検索トレーニング後に正答を1つに定めて提示することができる。最後に、本課題はオンラインでの実施であったために、解答を入力させる必要があったが、大学入学直後の調査参加者の中にはタイピングが不得意な学生がいる不安があった。そこで、オンライン辞書を使用すれば、コピー&ペーストで解答することができるため、タイピング能力の影響を受けにくいと考えた。以上の理由から、無料のオンライン辞書の使用が適切と判断した。また、語彙問題の正答率は、携帯電話とパソコンのいずれを使用した場合でも差がないという先行研究に基づき（Stockwell, 2010）、使用すべきオンライン辞書のみを指定し媒体は指定しなかった。

4.3 目標語彙

辞書方略指導を行った先行研究の多くは、検索

語彙を指定せず、各学習者が文章読解の最中に遭遇した、自身にとっての未知語を検索するという方式をとっていた（Koyama, 2013; 2015; 小山, 2015; Koyama & Ogura, 2018）。この方法は、実際の語彙検索行動により近いと考えられる。しかし、本調査のトレーニングは、第一義を、品詞を見ずに選ぶ傾向を授業時間外に取り組み課題を通して矯正することを目的としているため、学習者が即座に確認できる形で正答を提示する必要があったこと、さらに適切なものとして選出されるべき語義の品詞と辞書内における提示順に偏りが生じないように配慮する必要があったことから、検索語彙を指定した。

英語力測定テストの結果、本調査の対象としたクラスの受講者全体の英語力の平均が英検準2級より低かったことから、『大学英語教育学会基本語リスト 新JACET8000』（2016）において準2級程度とされている1000～2000番台の語彙の中から、複数の品詞の語義があることを条件として、選出した。この条件を満たす語彙を本調査指定辞書であるLongman Online Dictionaryで検索したところ、特に名詞と動詞の語義を持つ語彙が多かったため、最終的に初出の品詞が名詞で次に動詞が表示されている語彙（n-v型）と、その逆の順で語義が提示されている語彙（v-n型）を各16語ずつ合計で32語無作為に選出した（資料2）。

4.4 問題文

目標語彙は、ある程度まとまりのあるエッセイなどの中で提示すると、文章全体の難易度が辞書検索行動に影響する可能性があるため、あえて単文の中で提示した。単文内では、以下の4パターンで目標語彙を提示するようにし、各パターン8文ずつ作成した。つまり、n-v型の語彙を辞書内で初出の語義であるnとして（n-v型（n））、次出のvとして（n-v型（v））、v-n型の語彙を辞書内で初出のvとして（v-n型（v））、次出のnとして（v-n型（n））、それぞれ提示した。

その際、各文には目標語彙以外に難しい単語や複雑な文法が含まれないよう配慮した。作成した32文のFlesch Reading Ease（FRE）を、マイク

ロソフトワードを使用して測ったところ、54.7～100 (平均 85.3) となった。さらに、FRE によって、A (FRE=100) 11 文、B (FRE=80～99) 10 文、C (FRE=54.7～78) 11 文に分けた。テストセット及びトレーニングセットを作成する際は、セット毎の難易度に偏りが出ないように配慮した。また各セットに4パターンを偏りなく含めることで、必ずしも第一義が適切な語義とは限らないこと、品詞も確認する必要があることに気づかせることを意図した。具体的には、各セットに、1) n-v 型 (n) 等のパターン及び2) FRE レベル A～C が偏りなく含まれ、3) 各セットの FRE 平均が同程度 (82.53～87.93) になるように組み合わせた。

4.5 語彙検索テストと語彙検索トレーニング

本研究は、新型コロナウイルスの影響を受けて、前期 14 回 (週 1 回、各 100 分) すべてが非同期型オンラインで実施された授業の一部として実施した。そのため、全工程において教員が学生を直接対面で、ましてや個別に指導する機会はなく、課題の提示はすべて moodle 上で行い、Googleform を使って提出させた。解答の際は指定のオンライン辞書 Longman Online Dictionary で目標語を検索し、提示された文中で適切だと思う語義を辞書からコピー&ペーストして解答させた。その際、語義の頭に表示されている数字や記号も含めてすべてコピーさせた。こうすることで、目標語の語義を既に知っていても、必ず指定辞書を引かなくてはならないようにした。

語彙検索テストの目標語は、事前事後同一 8 語 (表 1) を出題の順番を変えて提示し、語彙検索トレーニングは各回 3 語ずつとした。つまりトレーニング及びテストを含めたすべての工程を通して、学生は合計 32 語 (トレーニング: 3 語 × 8 回、テスト: 8 語) の目標語を検索した。トレーニングが 3 語というのは心許ない数だが、新型コロナ対策で他科目においても増加した課題が大学入学直後の学生に与える負担が予測しきれなかったため、敢えて少なめに設定した。

調査開始第 1 週目に、辞書検索課題の取り組み

方についての説明、英語力測定テスト及び語彙検索事前テストを、翌週から 8 回語彙検索トレーニングを、前期最終週に語彙検索事後テストとアンケートを実施した。

語彙検索トレーニングにおいては、確実に品詞を確認するよう誘導するために、語義を答える前に、目標語の当該文中における品詞を解答させた。本調査で正答となる語義は名詞もしくは動詞のいずれかしかなかったが、現実にはこれらに加え、主なものとして形容詞及び副詞の可能性もある。そのため、正答として選ぶことはなかったが、形容詞と副詞も含めた 4 つの品詞から適切なものを 1 つ選択させた。一方、語彙検索テストにおいては、意図的に品詞に目を向けさせられなくとも品詞に注意した上で正しい語義を選べるかを検証するために、あえて品詞は問わず、語義のみを解答させた。

表 1 語彙検索事前事後テスト目標語彙

	問題文	文中意味
n-v型(n)		
fear	I understand your fear of being discovered.	恐怖 (心)、恐れ
benefit	He did all he could for the benefit of the poor.	利益、利点、ためになるもの
v-n型(v)		
bet	I bet five pounds on the horse.	《他》〈金など〉を賭 (か) ける
link	Some doctors link smoking to lung cancer.	《他》…を関連 [関係] させる、結びつける
v-n型(n)		
lock	Can you open the door lock for me?	《C》錠、ロック、かぎ
rise	One cup of coffee will cause a rise in blood pressure.	《C》(数・量などの) 増加、(物価・賃金などの) 上昇
n-v型(v)		
ban	You are banned from entering the place.	…を禁止する
contrast	We contrasted two boys.	《他》…を対比する、対照的に描く

n-v型、v-n型：それぞれ指定辞書内で名詞、動詞、あるいは動詞、名詞の順に語義が提示。() 内：文中の品詞。

また、学生への正答提示に関しては、語彙検索トレーニングでは、Googleformの自動採点機能を利用して、解答送信直後に正答及び合計点が表示されるよう設定した。こうすることで、必ずしも1つ目に出てくる語義で使われているわけではないことや品詞の選び方に気づき、以降のトレーニングへの取り組み方が改善されることを期待した。一方、語彙検索テストにおいては、事後テストでも同じ語彙を使用するため、正答も自身の合計点も確認できないように設定した。

4.6 分析

調査参加者98名のうち、参加の同意が得られなかった(9名)、英語力測定テスト未受験(8名)、事前テスト未受験(3名)、事後テスト未受験(3名)、テストの解答方法の間違いがあった学生(18名)は分析の対象外とした(複数の理由で削除された学生もいた)。なお、解答方法の間違いとしては、指定と異なる辞書を使用していた、目標語彙の意味を自分の知識に基づいて解答していた、文の全訳をしていた場合があった。その結果、分析対象となった学生総数は63名、英語力測定テストの平均点は10.44点(満点18点)となった。なお、約7割の学生が全8回のトレーニングを完遂したものの、未提出回があった学生もいたため、提出回数と学生の割合を後述の英語力別に2群に分けた場合も含めて示す(表2)。語彙検索トレーニング、語彙検索テストの両方にお

表2 トレーニング提出回数

	全体	A	B
8回	42 (66.67%)	21 (60.00%)	21 (75.00%)
7回	9 (14.29%)	5 (14.29%)	4 (14.29%)
6回	8 (12.70%)	5 (14.29%)	3 (10.71%)
5回	4 (6.35%)	4 (11.43%)	0 (0.00%)
合計	63 (100%)	35 (100%)	28 (100%)

() 外の数字は実数。

いて、文脈に沿っていると考えられる語義はすべて正答としたため、分析の際に複数の答えを正答とみなした語彙もあった。例えば、riseに関しては、表1に示した正答に加え、「5《常に単数形で》上がること、上昇」も正答とした。

5. 結果

5.1 分析対象者全体の語彙検索事前事後テストの比較

語彙検索トレーニングの効果が見られるかを検証するために、分析対象者63名の語彙検索事前事後テストの結果を比較した。テスト(各8点満点)の平均値は、事前テスト $M=4.19$ ($SD=1.48$)、事後テスト $M=4.51$ ($SD=1.66$)であった(表3)。その差が統計的に有意かを検証するために、平均値を対応あり t 検定で検証した結果、 $t(62)=1.40$, $p=.17$, $d=.18$ となった。つまり、分析対象者全体としては、統計的な有意差ではないものの、記述統計を見るとトレーニング後に選出語彙の正確さが向上する傾向が若干見られた。

表3 事前事後テスト平均値の比較

	N	M	SD
pre	63	4.19	1.48
post	63	4.51	1.66

5.2 英語力による語彙検索事前事後テストの比較

次に英語能力によって、事前事後テストの平均値に違いがあるかを検証した。英語力測定テスト(18点満点)の中央値(10.44点)でAB群に分けた。英語力測定テストの結果は、A群35名($M=13.14$, $SD=1.82$)、B群28名($M=7.07$, $SD=2.18$)となった。両群間の英語力に有意差があるかを検証するために、対応なし t 検定を行ったところ、 $t(61)=12.07$, $p<.001$, $d=3.06$ となり、英語力に有意差が認められた。因みに、本調査のトレーニングの提出回数(全8回)の平均はA群7.07回($SD=1.09$)、B群7.64回($SD=0.68$)で

あった。

語彙検索事前テスト（8点満点）の平均値はA群 4.51 ($SD=1.58$), B群 3.79 ($SD=1.26$) とA群のほうが高い結果となった。事後テスト（8点満点）の平均値は、それぞれA群 5.23 ($SD=1.61$), B群 3.61 ($SD=1.26$) であった。各群の事前事後テストの結果は表4に示す。英語力（対応なし：上・下）×語彙検索テスト（対応あり：事前・事後）の2元配置分散分析を行った結果、英語力×語彙検索テストの交互作用 $F(1, 61) = 4.04, p = .049, \eta^2 = .06$, 英語力の単純主効果 $F(1, 61) = 15.91, p < .001, \eta^2 = .21$, 語彙検索テストの単純主効果 $F(1, 61) = 1.45, p = .23, \eta^2 = .02$ となり、英語力の単純主効果と交互作用が有意であった。このことから、本調査のトレーニングの効果は英語力の影響を受けることが示唆された。本トレーニングは英語力がある程度担保されている学習者にとっては効果があるが、英語力が十分でない学生にとっては効果がない、あるいは負の効果がある可能性がある。

表4 英語力別の事前事後テスト平均値の比較

	A			B		
	<i>n</i>	<i>M</i>	<i>SD</i>	<i>n</i>	<i>M</i>	<i>SD</i>
pre	35	4.51	1.58	28	3.79	1.26
post	35	5.23	1.61	28	3.61	1.26

5.3 品詞の間違いの改善

次に本調査で改善を目指していた、「品詞の間違い」がトレーニング後にどのように変わったかを検証した。この点に関して、トレーニングの効果が見られるかを検証するために、事前事後テストの解答を次のように採点しなおした。完全な正解を2、品詞は正しいが語義が間違っている場合を1、品詞も意味も間違っている場合を0とした。なお、品詞が間違っているが意味が正しいということはあり得ないので、この可能性は考慮しなかった。このうち、品詞が間違っている解答、すなわち「0」を割り当てた解答がトレーニング後に減っていれば、この点が改善する傾向があるとい

えるだろう。

まず、先行研究では品詞を確認しない傾向が見られたが、本調査の分析対象者も同様の傾向があるかを検証するために事前テストにおける上記0~2の割合と全不正解における品詞による間違いの割合を示した（表5）。なお、全8問に対して63名が解答するため、504を母数とした。また、全間違いに対する割合では、間違い全体（1及び0の総数）に対して、品詞の間違い（0）がどの程度あるかを示している。不正解のうち品詞が間違っている解答は約7割であったことから、本研究の対象者も品詞間違いが多い傾向が見られたといえる。

表5 事前テストの品詞の観点から各解答の割合

	全解答に対する割合	全間違いに対する割合
完全正解(2)	52.38%	—
品詞のみ正解(1)	14.09%	29.58%
品詞も間違い(0)	33.53%	70.42%

本研究の分析対象者全体63名に関して、品詞が間違っていた解答数の平均値は事前テスト（8点満点）において、2.68 ($SD=1.11$), 事後テスト（8点満点）では2.46 ($SD=1.52$) であった（表6）。品詞の間違いに関して、分析対象者全体では、事前事後の差は-0.22とわずかではあるが改善の傾向が見られた。

表6 品詞間違いの数
事前事後テスト平均値の比較

	<i>N</i>	<i>M</i>	<i>SD</i>
pre	63	2.68	1.11
post	63	2.46	1.52

次に英語力の中央値で分けたAB群の事前事後テストの平均値を表7に示す。A群では間違いが減っているのに対して、B群ではむしろ増えていることから、本トレーニングは英語力が担保されている学生にとっては品詞の間違いを改善する効果が期待できる可能性がある一方で、英語力が十

分にはない学生にとっては効果がない、あるいは負の効果がある可能性が示唆された。

表7 英語力別の品詞間違いの数
事前事後テスト平均値の比較

	A			B		
	<i>n</i>	<i>M</i>	<i>SD</i>	<i>n</i>	<i>M</i>	<i>SD</i>
pre	35	2.43	1.17	28	3.00	0.94
post	35	1.86	1.40	28	3.21	1.34

5.4 第一義を選ぶ傾向の改善

次に、もう1つの意図した改善点である、辞書の初めに提示されている語義を安易に選ぶという傾向がトレーニングによって改善されたかを検証した。事前事後テストにおいて、第一義が正答であった4語に関しては、安易に第一義を選んで偶然正解したのか、他の可能性も考慮した上で第一義を選んだのかを判別することは難しいため、今回の分析の対象から外した。目標語彙が問題文内で辞書の第一義以外の意味で使われていたのは、ban, contrast, lock, rise の4語であった。これらの単語に対する解答を改めて、正しい場合を2、第一義を選んで間違った場合を1、第一義以外を選んで間違った場合を0と振り分けた。今回は特に、文脈内で正しい語義は第一義ではないのに、第一義を選んだ間違いがトレーニング後に減ったかどうかを検証するため、「1」の個数に焦点を当てた。

まず、本調査の分析対象者も先行研究と同様、安易に第一義を選んで不正解となる傾向があるかを検証するために、上記0~2の各解答の割合を表8に示した。今回は解答全体に対する各解答の割合は、第一義以外が正答である4問に63名が解答するので母数を252として割合を計算した。また、全間違いに対する割合では、間違い全体(1及び0の総数)に対して、第一義を選んだ間違い(1)がどの程度あるかを示している。表8の結果からも不正解の中で8割強が第一義を選んだ間違いであったことから、先行研究同様、本調査の分析対象者も第一義を選んで間違っ

ということがわかった。

表8 事前テストの辞書内での語義提示順の観点から各解答の割合

	全解答に対する割合	全間違いに対する割合
完全正解(2)	36.51%	—
第一義を選んだ間違い(1)	54.37%	85.63%
第一義以外を選んだ間違い(0)	9.13%	14.38%

分析対象者全体では、「1」の間違いの平均(最大4)は、事前テストにおいては、2.18 (*SD*=1.13)、事後テストでは1.83 (*SD*=1.30) となり(表9)、事後テストでは間違いの平均値が減少し、改善傾向が見られた。

表9 第一義を選んだ間違いの数
事前事後テスト平均値の比較

	<i>N</i>	<i>M</i>	<i>SD</i>
pre	63	2.18	1.13
post	63	1.83	1.30

次に英語力の影響があるかを検証するために、中央値で分けた2群の事前事後テストの平均値を表10に示す。事前事後テストの比較によると、A群の間違いが0.46減っているのに対して、B群の減少は0.21とA群よりも小さかった。このことから、2群間で効果に差があり、英語力が担保された学生にとってより高い効果がある可能性があるといえるものの、両群とも第一義を安易に選ぶという行動に改善傾向が見られたといえる。

表10 英語力別の第一義を選んだ間違いの数
事前事後テスト平均値の比較

	A			B		
	<i>n</i>	<i>M</i>	<i>SD</i>	<i>n</i>	<i>M</i>	<i>SD</i>
pre	35	1.86	1.17	28	2.57	0.96
post	35	1.40	1.29	28	2.36	1.13

5.5 辞書検索能力の向上と相関関係のある要素

本調査で学習者に課した語彙検索トレーニングによって辞書検索能力が向上するかという点に関しては、英語習熟度による違いが見られるという結果になった。しかしながら、今回の検証における辞書検索能力の向上に影響しうる要素として、事前テストの結果に反映される、もともとの辞書検索能力及びトレーニングの回数も考えられる。そこで、辞書検索能力の向上と相関が高い要素を検証するために、スピアマンの相関係数を求めた(表 11)。その結果、トレーニングの回数に関しては、いずれの要素とも相関が見られず、本調査においては影響がなかったといえる。事後テストの結果は事前テストに反映される辞書検索能力($r_s=.31$)よりも英語力($r_s=.59$)との相関のほうが強いことがわかった。同様に、事後の品詞間違いも辞書検索能力($r_s=-.27$)よりも英語力($r_s=-.56$)と、事後の第一義を選んだ間違いも辞書検索能力($r_s=-.25$)よりも英語力($r_s=-.52$)とのほうが相関が強かった。すなわち、今回のトレーニングによって辞書検索能力が向上するかは既存の辞書検索能力ではなく、英語力によるといえるだろう。

5.6 アンケート結果

全工程終了後に実施したアンケート結果のうち、分析対象となった63名の選択式の質問に対する回答を表12にまとめる。質問はQ1単語を知っていた、Q2トレーニング後品詞に注意するようになった、Q3必ずしも1つ目の語義が正しくないと気づいた、Q4辞書検索に対する抵抗感が低くなった、の4項目であった。

Q1の結果から分析対象者の約7割にとって、本調査で選定した語彙がほぼ未知語であったことから、選定語義のレベルは適切であったといえるだろう。なお、「ほぼ全部知っていた」と回答した2名も、事前テスト及び英語力測定テストにおいて他の対象者との差は特段見られなかったため削除はしなかった。本調査で改善を狙った2観点については、「とてもそう思う」及び「そう思う」という回答の合算値が、Q2の品詞に関しては82.53%、Q3の辞書内の提示順に関しては96.77%と、かなり高い水準で肯定的であった。同時に、85.71%が辞書を引くことへの抵抗感も低くなったと回答した。いずれの質問も誘導的であったことは否めないが、学習者の印象としてもオンラインの辞書検索課題は有効であったといえるだろう。

表 11 各要素の相関

	英語力	トレ	前	後	前品詞	後品詞	前第一	後第一
英語力	—							
トレ	- 0.17	—						
前	0.37**	- 0.02	—					
後	0.59***	- 0.10	0.31*	—				
前品詞	- 0.36**	- 0.05	- 0.78***	- 0.40**	—			
後品詞	- 0.56***	0.12	- 0.27*	- 0.89***	0.38**	—		
前第一	- 0.44***	0.13	- 0.66***	- 0.35**	0.79***	0.34**	—	
後第一	- 0.52***	0.04	- 0.25*	- 0.78***	0.36**	0.86***	0.35**	—

* $p<.05$, ** $p<.01$, *** $p<.001$

トレ：トレーニング回数, 前, 後：事前テスト, 事後テスト, 品詞：品詞の間違い, 第一：第一義を選んだ間違い

表 12 調査後アンケート結果

	4	3	2	1
Q1	2 (3.17%)	18 (28.57%)	33 (52.38%)	10 (15.87%)
Q2	13 (20.63%)	38 (61.90%)	11 (17.46%)	0 (0%)
Q3	42 (66.67%)	19 (30.10%)	2 (3.17%)	0 (0%)
Q4	15 (23.81%)	39 (61.90%)	9 (14.29%)	0 (0%)

() 外は実数。Q1 に対する回答は、ほぼ全部知っていた (4)、ほとんど知っていた (3)、あまり知らなかった (2)、全然知らなかった (1) の 4 択。Q2~Q4 は、とてもそう思う (4)、そう思う (3)、あまりそう思わない (2)、全然そう思わない (1) の 4 択。

アンケートの最後には、「課題を通して気が付いたこと、課題について思っていたことがあれば何でも書いてください」という自由記述の質問を設けた。この質問への回答の多くは、1) 品詞の確認、2) 語義の辞書内での提示順、3) 辞書検索への意識、に関する内容と大別することができ、先の選択式の質問に影響を受けてしまっている印象は否めない。しかしながら、当初意図していなかった効果を感じていた学習者もいたことがわかった (表 13)。なお、1) ~3) に分類できる、意図していた効果を述べているコメントはあえて記載しない。

辞書もしくは英語は苦手、難しかったというコメントも 5 件あったが、それ以外は総じて前向きなものであった。例文、目標語の形、目標語の前後を見る癖がついたという回答もあったが、これらの観点は、一般的に辞書指導で重視される点であるため、これまでの学校教育の中で受けた指導が強化された可能性もある。また、知っていると思っていた意味と異なる語義で使われていた場合もあったことで、改めて辞書の重要さに気づいた、辞書検索行為そのもの、もしくは辞書そのものを面白いと感じたという意見もあった。さらに、オンライン辞書に関する気づきがあったことを示すコメントもあり、学習者ごとにそれぞれの学びがあったことがわかった。

表 13 調査後アンケート (自由記述)

意図していた以外の観点への気づき
<ul style="list-style-type: none"> • 例文などで使い方を学べるので良かった。 • 例えば、複数形にするだけで意味が変わったり、後に続く前置詞が変わるだけで大きく意味が変わったりすることが分かり、注意して辞書を引くようになりました。 • デジタル化が進む中、辞書もデジタル化すると、いよいよ紙の辞書でなければならない場面というのが減りつつあるのではと思った。
辞書検索行為に対する好意的な感想
<ul style="list-style-type: none"> • 今までは英語がわからないとすぐ Google 翻訳に頼っていたけど、ロングマン辞書を使うことでほかの意味や文法も学べてよかった。 • 見たことあるなと思う単語が出てきたときちゃんと調べてみると違う意味があったりして新しい発見ができたのでよかったと思いました。 • 知らない意味を発見できることが楽しかった。 • 大体の意味はこれだと覚えてきた単語の中に他にも様々な意味があり学習するうえでためになった。 • カッコになっている部分の単語だけではなく、他の分からない単語もわからないものがあったら自分から調べられるようになりました。

6. 考 察

本研究では、課題を提示する以外教員は直接介入せず、宿題としてオンラインの語彙検索トレーニングを課し、1) 語義選出の正確さは向上するのか、2) 語義選出の正確さは英語習熟度とどのように関係するのか、3) 先行研究に挙げられていた英語学習者の辞書方略における、「第一義を安易に選ぶ」、「品詞を確認しない」という 2 点の問題傾向が改善されるのか、4) 辞書検索能力の向上に寄与しうる能力は何か、の 4 点を検証した。

その結果、本調査のトレーニングは、特にある程度英語力が担保されている学生にとっては有効である可能性が示唆された。一方で英語力が十分でない学生にとっては、効果がない、あるいはむしろ負の効果がある可能性があることがわかった。上記 2 点の問題傾向のうち、品詞を確認するという観点においても同様の傾向が見られた。それに対して、第一義を安易に選ぶという観点については、効果に差はあるものの英語力にかかわら

ず改善が見込める可能性が示唆された。また、今回のトレーニングの効果は既存の辞書検索能力やトレーニングの回数よりも、英語力に左右されるということもわかった。

先行研究では、教員の強い関与がある辞書指導に効果が見られたが (Koyama, 2013; 2015; 小山, 2015; 小山・藪越, 2011), 本研究の結果に基づけば、教員の関与が低い、授業時間外に取り組む「オンラインのトレーニング」という形での辞書指導であっても、一定の英語力がある学生にとっては効果的である可能性がある。逆に、英語力が担保されていない学生にとっては、間違いの理由に自分で気づくのが難しく、逆に混乱を招いてしまった可能性がある。しかしながら、トレーニングの提出回数を見ると、英語力が低い学生の方が全8回を完遂した学生の割合が高いというのも事実である。つまり、英語が苦手でもこの辞書検索の課題自体は苦痛を感じることなく、継続的に取り組むことができるものであることが予測される。さらなる検証が必要ではあるが、明示的な指導を与えることで英語力が十分でない学生にとっても効果があることが示されれば、大人数を対象に、限られた授業時間を割くことなく、学生が継続的に取り組めるという点で、このトレーニングは高い実用性が期待できる。

全10回の工程を完遂できず、分析対象外となった学習者の最終アンケートの結果を見ると、「語彙が簡単過ぎた」、「自分が知らない単語を調べたほうがいい」というような目標語彙への不満に加え、「どこまでコピーすればいいかわからなかった」、「正しい答えを入力したのに空白が入ったせいで間違いとみなされた」、といった自動採点を可能にするために採用した方式を原因とする否定的なコメントが見られた。また、約20名の学生が文の翻訳を書いたり、自分の知識で単語の意味を書いたりしたことで分析対象外となったが、彼らは一見自身の知識を必要としないように感じられる、今回の課題の形式に違和感を覚え、馴染み深い、自身の知識を示すような解答を書いた可能性が考えられる。このような不満や違和感が課題完遂の妨げになった可能性を考慮し、目標

語彙の選出、課題提示方法を見直し、課題の目的、辞書検索の際に注意すべき観点をより明示的に示す必要があるだろう。また、「そもそも品詞がわからない」というコメントも見られたため、事前に品詞を指導することでより高い効果が期待できるかもしれない。

本研究では、新型コロナウイルスの影響による全授業のオンライン化により時間の制約、学生負担過多が予測されたため、検索語彙は3語、トレーニングも8回と限られていたが、そのことが統計的に有意な差が出なかった原因として考えられる。今後は語数や回数を増やすことでより信頼性の高い結果が得られる可能性がある。同時に、対象者の熟達度よりも少しだけ高いレベルの語彙を選出していたが、より難易度の高い語彙を選出した場合、効果が顕著になるかもしれない。また、辞書内での語義提示順は出現度に基づいているため、本調査で第一義を選んで間違ったとみなした解答も、第一義を安易に選んでいるのではなく、既知の語義を選んでいた可能性もある。その可能性を排除するためには、辞書検索課題に取り組む前に当該語彙の語彙テストを実施するとより厳密な成果を示すことができるだろう。本調査のトレーニングの実用化に向けて、今後さらなる検証を続けたい。

《注》

- (1) ベネッセが開設している「辞書引き学習のススメ」というウェブサイト (<https://www.teacher.ne.jp/jiten/study/chu/jirei/jirei02-01.html>) において、中学校の授業の一環として辞書指導を行う際のアイデアが複数挙げられている。

引用文献

- 相澤一美・望月正道 (2012). 英語語彙指導の実践アイデア集. 大修館書店.
- 大学英語教育学会基本語改訂特別委員会 (編) (2016). 大学英語教育学会基本語リスト 新 JACET8000. 桐原書店.
- Hurbert, R. P. (2017). The use of smartphones as English dictionaries by university students in Japan and China. 京都産業大学論集人文科学系列, 50, 367-383.
- Koyama, T. (2013). Enhancing learners' E-dictionary skills through strategy training. *Selected papers from the 8th ASIALEX International Conference*.

173-178.

小山敏子 (2015). 電子辞書の方略指導の効果. 外国語教育メディア学会 (LET) 関西支部研究集録, 15, 109-120.

Koyama, T. (2015). The impact of E-dictionary strategy training on EFL class. *Lexicography ASIALEX*, 2, 35-44.

Koyama, T., & Ogura, M. (2018). A new approach of enhancing reading and reference skills using iPad dictionary apps.: A pilot study. 大阪大谷大学紀要, 52, 113-119.

小山敏子・藪越知子 (2011). 電子辞書使用の方略指導への一考察: メタ認知活動を取り入れて. 外国語教育メディア学会 (LET) 関西支部研究集録, 13, 79-87.

小山敏子・山西博之 (2017). 大学生の英語辞書利用に対する意識変化. 第43回全国英語教育学会高根研究大会発表予稿集, 322-323.

文部科学省 (2017). 中学校学習指導要領解説 外国語編

中山夏恵・大崎さつき (2009). 読解における効果的な電子辞書を目指して: 辞書スキル特定のためのインタビュー結果から. 共愛学園前橋国際大学論集, 9, 61-79.

西尾克哉 (2013). 辞書指導の不易と流行: 『ベーシックジーニアス』を使って. G.C.D. 英語通信, 52, 6-7.

大藪修一・藤田恵里子 (2021). EFL学習者の辞書タイプと英語熟達度が語義選択の正確性に与える影響: 印刷辞書とスマートフォン・オンライン辞書を比較して. リメディアル教育研究, 15, 45-56.

Stockwell, G. (2010). Using mobile phones for vocabulary activities: Examining the effect of the platform. *Language Learning & Technology*, 14 (2), 95-110.

内田富男 (2009). 辞書を使った語彙・コロケーションの指導とその効果: 英語で伝える力と自ら学ぶ力を育てる『和英表現ノート』作りの実践. 第21回「英検」研究助成報告, 110-123.

安井健一郎 (2009). 大学生の英和辞典利用: 初級レベルの英語学習者について. 尚美学園大学総合政策研究紀要, 16・17, 109-123.

資料1 英語力測定テスト (問題例)

単独語彙の知識を問う問題 11 問 (例 (1)), 連語の知識を問う問題 5 問 (例 (2)), 文法を問う問題 (例 (3)), 前置詞を問う問題 (例 (4)) 各 1 問ずつの合計 18 問であった。

問題: () に入る適切な語彙を選びなさい。

- (1) Tracy had to write a paper about the moon for science class. She () the Internet to find more information about the topic.
 1 noted 2 announced
 3 packed 4 searched
- (2) The firefighter ran into the burning building () his own life to save a family's dog. When he came out with the dog, people in the neighborhood praised him for being so brave.
 1 by the side of 2 at the risk of
 3 in the course of 4 on the edge of

- (3) Our vacation to Europe was great, wasn't it? I liked Paris and Rome a lot. — Yeah, they were nice, but I enjoyed London the (). I want to go back there sometime.
 1 many 2 more 3 most 4 much
- (4) Jason took a class on how to do well () job interviews. He learned about ways to prepare, what to wear, and how to answer questions.
 1 over 2 in 3 behind 4 to

資料2 目標語彙リスト

	出題	目標語彙	新 JACET8000		
n-v 型	n	trust	1165		
		display	1245		
		interest	1454		
		tax	1485		
		cost	1514		
		surface	1556		
		fear	1589		
		benefit	1592		
		v	v	aid	1629
				contrast	1667
				doubt	1718
profit	1752				
limit	1819				
aim	1892				
v-n 型	v	request	1894		
		ban	1962		
		count	1288		
		fail	1742		
		arrest	1837		
		link	1867		
		bet	1888		
		feed	1903		
		crash	1911		
		scream	1975		
n	n	pay	1060		
		search	1169		
		rise	1183		
		push	1231		
		promise	1285		
		float	1425		
		rescue	1989		
		lock	1994		